

飲ミネーションと飲スピレーション

高橋 英明

分析化学会北海道支部が設立されてから、本年で 50 周年を迎えるという。まことにご同慶の至りです。現在、分析化学会の北海道支部選出の理事としてその末席を汚させて頂いておりますが、ただただ支部会員歴が長いとの理由だけと考えております。金属表面処理あるいは腐食防食の方面で主に仕事をさせて頂いているため、分析化学会の全国大会にはほとんど発表したことのない、“不良会員”です。会費を黙々と 30 年以上払い続けてきたという点では、優良会員かも知れません。しかし、3 年から 4 年に一度北海道で開かれる年会・討論会には万難を排して出席・発表させて頂いていますし、日本化学会北海道支部との共催で年 2 度開かれる夏季・冬季北海道支部大会には、律儀にも毎回発表させて頂いております。そんな訳で分析化学誌にほとんど投稿したこともありませんが、原子吸光分析のメカニズム解明のため、櫻田 修氏（現岐阜大学勤務）・多賀光彦先生の研究のお手伝いをしたことがあり、XPS を用いての論文 2 報が唯一の分析化学会員の証かも知れません。

私と分析化学会北海道支部との出会いは、私が、永山政一教授の主宰する「工業分析化学第一講座」に、昭和 42 年 4 月、卒研究生として配属されたのが、最初である。当時、永山研には、後藤克巳先生（富山大学名誉教授）が助教授としておられ、洞爺湖に注ぐ河川の水質調査をされていた。何回か、調査にお供し、胴長を着けて川の流量などを測定したこともあった。また、川村静夫助手（苫小牧高専名誉教授）には、何度となく山スキーに連れて行って頂き、新雪・深雪をかき分けてのスキー滑走の醍醐味を教えて頂いた。田村紘基・金野英隆の両氏には、学生時代から永山研の同僚として良き悪しきにつけ、影響し合った仲で、それぞれ研究室は異なるが、腐れ縁は現在も続いている。

当時、北大工学部では、伊藤光臣教授、青村和夫教授、永山政一教授が支部の主要メンバーとして活躍されていた。鈴木カップリングで有名な鈴木 章先生も当時の伊藤研の助教授として活躍されており、氷雪セミナーで「NMR の石炭構造解析」の話しを聞いた覚えがある。後年、分析化学会会長を務められた四ッ柳隆夫先生（現宮城高専校長）は、小生と入れ違いで、青村先生が主催する工業分析化学第二講座の助教授として移動したばかりであった。また、渡辺寛人先生は、室蘭工業大学で室住正世教授の研究室の助教授として活躍されていたが、その年一年間の国内留学で私どもの研究室で溶媒抽出の仕事をされていた。

その頃、世の中ではベトナム戦争が激しさを増し、全国各地で大学紛争が勃発するなど、古き良き時代からの訣別を迎えていた。そんな折、分析化学会北海道支部の事務局が、私どもの研究室に間借りすることがあった。昭和 43 年に教養部の建物で“ゲバ学生”（決して差別用語を用いるつもりはないが、当時そのような言葉が使われていた。）に占拠・封鎖されたためである。そのときの支部長は、教養部で分析化学の研究室を主宰されていた藁目清一郎教授で、吉田仁志・多賀光彦助教授とともに支部を支えていた。私事乍ら、藁目先生は、教養時代、化学 I, II を教わった恩師である。そんな訳で、学生時代より、分析化学会北海道支部の多くの先生方と接する機会があり、たいへん影響を受けたし、現在の自

分の拠り所となっている。

博士課程を修了し、永山研の助手となって以降、支部幹事の仲間に入れて頂き、冬季研究発表会実行委員・世話人、支部会計幹事、支部ニュース編集委員、年会・討論会実行委員、氷雪セミナー世話人、化学教育セミナー世話人、「環境化学分析」編集委員としてお手伝いさせて頂き、支部の多くの方々と知遇を得ることができた。まだ 20 代から 30 代前半の頃、当時神原富民教授が主催する理学部の分析化学研究室の大関邦夫助教授（現弘前大学）には、折に触れ、いろいろアドバイスを頂いた。過日、分析化学会の理事会に出席した折、東北支部選出の理事としての大関先生にお会いし、旧交を温めることができた。助手時代、青村研の助教授をされていた田中虔一助教授にも、研究者としての心構えなど多くのものを教えて頂いた。田中先生が東大物性研に移られたのちにも、わざわざ呼んで下さり、私がポスドクとしてアメリカに留学した折、吉田仁志先生が、カナダの NRC に滞在されており、オタワで先生の自らの手料理を家内共々ご馳走になったのが、懐かしい思い出である。帯広で分析化学討論会があったさい、総務担当の実行委委員としてお手伝いさせて頂き、エクスカッションの“旗持ち（ガイド）”として一泊二日の小旅行を楽しむことができた。多賀先生とは、いろいろな局面で一緒に仕事をさせて頂いたが、いつも前向きに、そして楽しく仕事をされる先生の姿から多くのものを教えられた。「環境化学分析」の編集委員会では、片岡正光委員長をはじめ、伊藤八十男氏、加藤拓紀氏、乗木新一郎氏と、毎週土曜日私の部屋に集まって作業をしたのが懐かしい。片岡氏が毎回持参してくれた札幌の銘菓の味も忘れられない。

正月明け早々に開かれる“氷雪セミナー”では、毎回各界の著名な研究者の話しが聴けて楽しかったし、そのような講師と夜の懇親会で親しくお話しできるのも氷雪セミナーならではのである。もう、十数年前になるが、電子科学研究所の川崎昌博先生（現京都大学）が講演されたことがあった。レーザーによる気体光化学反応の話しであった。最後にレーザー照射による表面改質の話しがあり、それを拝聴したとき、大変興味をそそられた。その晩、川崎先生に詳しいお話を伺い、数日後には先生の研究室を訪問・見学させて頂いた。それが縁で、レーザー照射によるアルミニウムの表面パターニングの仕事を始め、川崎先生には、全面的なご支援を頂くことができた。現在でもこの研究を続けており、最近、京都大学に特別講義でお伺いした折、先生をお訪ねして研究の進展を報告させて頂いた。

氷雪セミナーでは、毎年多賀先生との囲碁を楽しみに参加させて頂いている。毎年、“あわや”と言うところまで行くのだが、終わってみればおいしいところで大魚を逃す。本年、先生のまさかの見損じがあり、初めての金星を挙げさせて頂いた。あきらめずにやっていたら、良いことも起こる喩えである。

数年前、最後のご奉公と思い、支部長を引き受けた。大過なく、次の三浦敏明支部長へバトンを渡すことができ、ほっとしたものである。在任中、本部支部連絡会議に出席したさい、四ッ柳先生が会長を務められており、久しぶりの再会を果たすことができた。

分析化学会北海道支部とは、そろそろ 40 年のお付き合いとなるが、伊藤光臣先生、青村和夫先生、神原富民先生、藤本昌利先生らは、他界されたが、養目先生をはじめ多くの方々

がご健在で、時々支部の集まりに顔を見せて下さるのは、大変うれしいことである。悲しい事件もあった。渡辺寛人教授が主宰された工業分析化学第二講座の助手の瀬川 規君が、暴走自動車にぶつけられ、三日間意識が戻らないまま帰らぬ人となったことである。分析化学実験を一緒に担当していたこともあり、大変ショッキングな出来事であった。また、つい最近の話であるが、北海道支部を陰で長年支えて下さった「津元理科産業」が倒産の憂き目にあったのは、本当に残念である。

他支部に属する分析化学会の会員の皆様とお話をすると、誰もが異口同音に「北海道支部の支部活動の活発さ」を挙げる。そんなとき、「本当に素晴らしい支部です」と相槌をうつことにしている。他支部の方々にしてみれば、きわめて少ない人数で分析化学に関する本を次々に出版する支部活動が印象的に違いない。私も、他にもいろいろな学会の会員ではあるが、本の印税が支部活動費の約半分を占め、その潤沢な資金により、氷雪セミナー、公開セミナー、化学教育セミナー、緑陰セミナーおよび夏季・冬季研究発表会などをこなし、支部ニュースを発行するなど、このような活発な活動を続けている支部は、他に見当たらない。このような活発な活動を続けてこられたのは、諸先輩の努力の賜物ではあるが、コミュニケーションを大事にする北海道支部の伝統にあると思われる。時代の趨勢ではあるが、分析化学の学問分野も大きく様変わりした。生体分析、環境分析が発展する一方、ICP-発光分光分析、ICP-質量分析などの物理的計測法の発達により、滴定、吸光分析などクラシックな化学的手法が姿を消しつつある。しかし、どのような世の中になろうとも“分析科学”の果たす役割は、大きくなることはあっても、後退することはない。いろいろな分野の研究者・技術者を取り込んで、ますます活発に支部活動を続けていってほしいものである。確か、支部設立25周年記念誌に、室住先生が、北海道支部の“飲コミュニケーション”の多さに苦言を呈した文章をしたためていたのを思い出すが、やはり潤滑剤は重要である。次世代の方々には、グラスを片手に、支部のさらなる発展の方策を練ってもらいたいものである。きっと素晴らしい“飲スピレーション”が、生まれると信じている。

(北海道大学大学院工学研究科)